

福岡市埋蔵文化財調査報告書第362集

板付周辺遺跡調査報告書 (16)

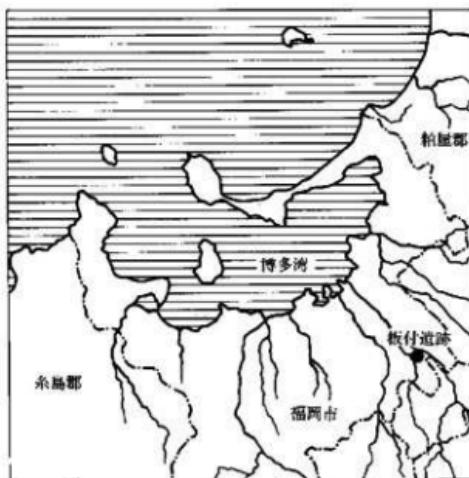
— F-5 i 調査地点 —

1994

福岡市教育委員会

板付周辺遺跡調査報告書 (16)

— F-5 i 調査地点 —

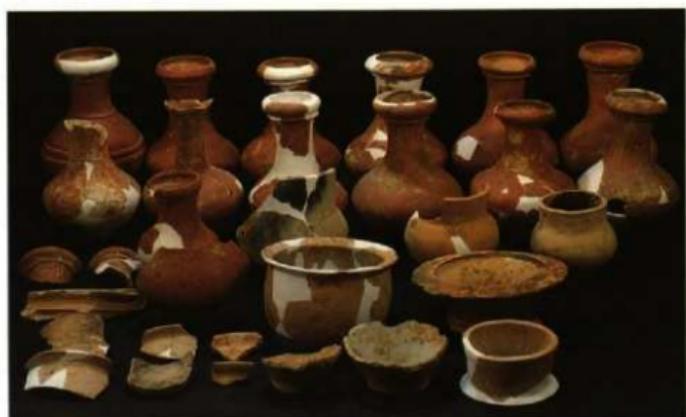


1994

福岡市教育委員会



1) 第1号井戸出土土器



2) 第2号井戸出土土器

序

古くから大陸文化受窓の門戸として栄えてきた福岡市内には、多くの埋蔵文化財が分布しています。本市では、特に文化財の保護・活用に努めています。そのなかでも国指定板付史跡を中心とした板付周辺は重点地区として、各種の開発事業によって失われる遺跡については、記録保存のための発掘調査を行なっています。

本書もこうした遺跡の一つで、博多区板付二丁目12の個人専用住宅建設に先だって、板付遺跡として発掘調査を実施しました板付遺跡F-5i調査地点の報告書です。

発掘調査の結果、弥生時代の井戸、近世の溝が検出でき、現在行なっています板付史跡整備に活用できる貴重な資料を得ることができました。

入江晴司氏を始めとする関係各位のご協力に感謝の意を表しますとともに、本書が文化財理解の一助となり、広く活用されることを願っています。

平成6年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 尾花剛

例　　言

1. 本書は、博多区板付二丁目12-12・29・97の人江皓司氏による専用住宅建設に伴う事前調査として、福岡市教育委員会埋蔵文化財課が1989年4月に発掘調査を実施した板付遺跡F-5i調査地点の調査報告書である。
2. 本書使用の沉構実測図は、山口謙治、池ノ上宏、石田晴美、尾崎君枝、甲斐田嘉子、坂井昭美、星子輝美、山口朱美が行なった。
3. 本書使用の遺物実測図は、土器を加藤周子がおもに行ない、平川敬治が手伝った。なお、その他の遺物は山口謙治が行なった。
4. 本書使用の写真は、遺構を山口謙治、池ノ上宏、遺物を平川敬治が行なった。
5. 本書使用の図面の整図は、山口謙治、石田晴美、山口朱美が行なった。
6. 本書使用の方位は磁北である。
7. 本書の執筆・編集は山口謙治が行なった。
8. 本調査の出土遺物および記録類は、福岡市埋蔵文化財センターで一括収蔵・保管し、公開していく。

本文目次

I 序説

1. はじめに	1
2. 調査体制	4
3. 調査地点の位置と立地	4

II 調査の記録

1. 調査の概要	5
2. 遺構と出土遺物	7
III おわりに	30

挿 図 目 次

Fig. 1	調査前状況	1
Fig. 2	板付遺跡の位置と周辺の遺跡	2
Fig. 3	板付遺跡および周辺遺跡調査地点位置図	3
Fig. 4	調査地点全景	5
Fig. 5	調査地点造構配図	6
Fig. 6	第1号井戸 (SE-01) 実測図	8
Fig. 7	第1号井戸遺物出土状況	9
Fig. 8	第1号井戸出土土器実測図(1)	10
Fig. 9	第1号井戸出土土器	11
Fig. 10	第1号井戸出土土器実測図(2)	12
Fig. 11	第2号井戸 (SE-02) 実測図	14
Fig. 12	第2号井戸	15
Fig. 13	第2号井戸出土土器実測図(1)	16
Fig. 14	第2号井戸出土土器(1)	17
Fig. 15	第2号井戸出土土器実測図(2)	18
Fig. 16	第2号井戸出土土器(2)	19
Fig. 17	第2号井戸出土土器実測図(3)	20
Fig. 18	第2号井戸出土土器(3)	21
Fig. 19	第2号井戸出土土器実測図(4)	22
Fig. 20	第3・4号井戸 (SE-03・04) 実測図	23
Fig. 21	第3・4号井戸遺物出土状況および完掘状態	24
Fig. 22	第3号井戸出土土器実測図	24
Fig. 23	第3・4号井戸出土土器	25
Fig. 24	第4号井戸出土土器実測図	26
Fig. 25	第5号井戸 (SE-05) 実測図	27
Fig. 26	第5号井戸遺物出土状況および完掘状態	28
Fig. 27	第5号井戸出土土器実測図	28
Fig. 28	第5号井戸出土土器	28
Fig. 29	出土石製品・土製品実測図	29
Fig. 30	出土石製品・土製品	30

I 序 説

1. はじめに

博多区板付二丁目12-12・29・97に、入江皓司氏による専用住宅の建設が計画された。この地は板付遺跡の中央部に位置し、国指定の板付史跡に隣接している。入江皓司氏の依頼を受けた商栄協立株式会社より、福岡市教育委員会埋蔵文化財課（以下、埋文課とする）に遺跡有無を確認する埋蔵文化財事前審査願いが提出された。

事前審査願いを受け、埋文課は遺構遺存状態を確認するため、1989年2月18日に試掘調査を実施した。試掘調査は、木造家屋があったため約6m²について実施した。その結果、鳥栖ロームの下部が確認できたが、遺構は検出できなかった。この試掘結果から、この地は板付中央台地上に所在していることがわかり、削平を受けているものの、井戸・溝など深い遺構の遺存が予想されること、史跡に隣接していることから、埋文課は発掘調査実施を決定した。

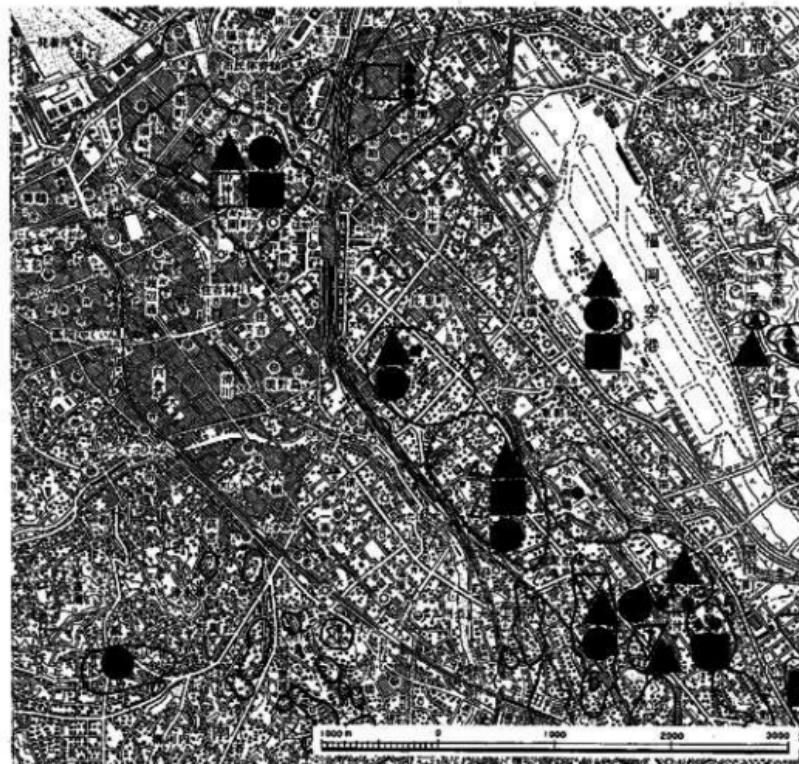
以上の調査決定を受け、入江皓司氏をはじめとする関係者との協議を行ない、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

本調査は、板付史跡の北側の様相把握を目的として、3週間実施した。



Fig. 1 調査前状況

遺跡調査番号	8901	遺跡略号	ITZ-F-5i	分布地図番号	24-A-8
調査地地籍	博多区板付二丁目12-12・29・97				
開発面積	185.19m ²	調査対象面積	185.19m ²	調査実施面積	163.4m ²
調査期間	1989年4月8日～同年4月22日				



1. 板付遺跡 5. 高畠遺跡 ▽先土器時代 △縄文時代 ▲弥生時代
 2. 比恵遺跡群 6. 井尻遺跡 ●古墳時代 ■古代 □中世
 3. 博多遺跡群 7. 諸岡遺跡 4. 那珂遺跡群 8. 番居遺跡

Fig. 2 板付遺跡の位置と周辺の遺跡

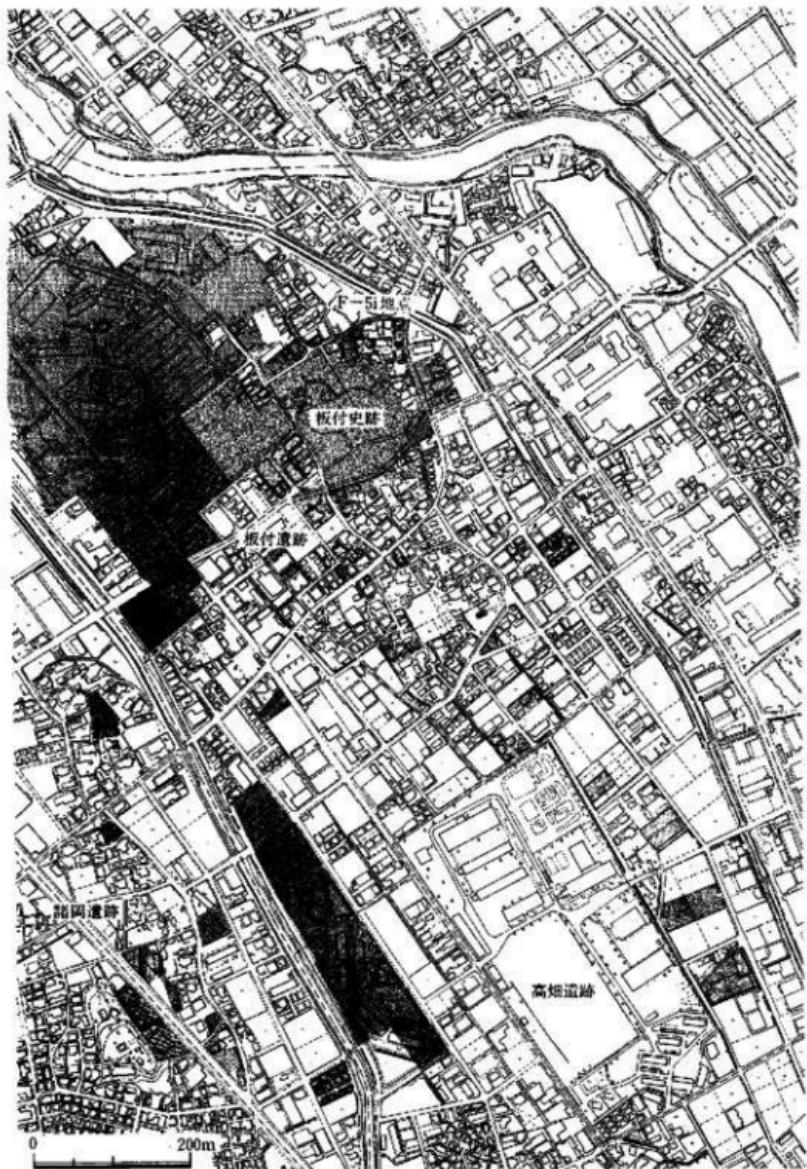


Fig. 3 板付遺跡および周辺遺跡調査地点位置図

2. 調査体制

調査体制として、以下に示す組織を構成した。緊急調査のため充分なる体制を組むことができなかつたが、人江晴司氏、商榮協立株式会社をはじめとする関係各位の協力のもとに、発掘調査は進行し、終了することができました。なお、整理報告作業も順調に進行し、本報告書を発行することができました。関係各位のご協力に謝意を表します。

調査主体	福岡市教育委員会埋蔵文化財課第二係		
教育長	佐藤善郎（前）	尾花 崎	
文化財部長	川崎賢治（前）	後藤 直	
埋蔵文化財課長	柳田純孝（前）	折尾 学	
第二係長	柳沢一男（前）	山崎純男	
調査担当	山口譲治		
試掘調査担当	横山邦雄（文化財主事）	常松幹雄 小畠弘己	
調査・整理補助員	池ノ上宏（現津屋崎町教育委員会）	大丸陽子 加藤周子 平川敬治 山口朱美	
調査・整理協力者	有吉千栄子 池田礼子 石田晴美 太田明子 尾崎君枝 甲斐田嘉子 神谷玲子 坂井昭美 品川伊津子 平野徳子 星子輝美 松下節子		

3. 調査地点の位置と立地

福岡平野は、平野東部を北流する御笠川、平野中央部を北流する那珂川によって形成されている。両河川の中流域から上流にかけては多くの支流があり、各支流間には南から北へ延びる中・低丘陵が多くみられる。これらの丘陵を中心とした地域には、各時代・時期の多くの遺跡が所在している。御笠川は、中流域で支流である諸岡川と分岐し、大きく東へ蛇行している。御笠・諸岡両河川間には標高15m前後の帯状の丘陵が北へ延び、さらに北側に島状をなす標高11m前後の板付台地があり、板付遺跡が所在している。

板付台地は、頂部を12mとする台地が2ヶ所あり、さらに現在の板付北小学校の調査結果から3ヶ所の頂部をもっていたことがわかり、北から北台地・中央台地・南台地と仮称している。板付遺跡は板付中央台地を中心として所在しており、板付中央台地の約1/3とその西側の沖積地の一部が板付史跡となっている。

本調査地は、板付史跡の北側に隣接しており、調査前は宅地となっていた。また、本調査地は、国土地理院発行の5万分の1地形図（福岡）の北から23.3cm、東から8.2cmの位置にあたる。

II 調査の記録

1. 調査の概要

専用住宅建設予定地は、前述したように国指定板付史跡が所在する板付中央台地の北端部に位置し、史跡に近接している。標高は9.6m前後に位置し、木造家屋解体後、調査を実施した。

この地は、北側は幅3m強の道路、東側・西側・南側は民有地と接し、境界にはブロック塀があり、北側を底辺とする台形を呈している。史跡に近接し、台地上に立地していることから建設予定地全域を調査対象としたが、境界にブロック塀があるため、それぞれ1mの引きをとった。さらに北西部コーナー部の30m²を堆土置き場として確保し、調査区を設定した。

調査は10~80cmの盛り土および整地層を重機で除去することから始めた。その結果、標高約9~9.5mの鳥栖ロームの上部で遺構を検出した。ちなみに、試掘調査は近世溝である第7号溝中央部に入っており、鳥栖ローム下部を確認し、井戸など深い遺跡の遺存を予想していた。

検出遺構としては、弥生時代中期後半から後期前半の井戸2基と弥生時代終末期から古墳時代初頭の井戸3基、近世の溝（漆を含む）4条がある。井戸は、調査区中央部で第1・2号井戸が、北東部で第3・4号井戸がそれぞれ切り合い、北西部で1基出土している。本調査地の南東隣接地のF-5a調査地点で1基、西側隣接地のF-5c調査地点で3基の弥生時代後期後半の井戸を検出している。本調査地検出の第2・4号井戸は、F-5a・5c両調査地点検出の井戸より古く、第1・3・5号井戸は、他両調査地点検出のものより後出のものである。また、板付史跡の北側隣接・近接の各調査地点では、中世から近世の東西・南北方向の直線的な溝が検出されており、本調査地検出の4条の溝も一連のものと考えられ、第8・9号溝は溝のコーナー部と



Fig. 4 調査地点全景

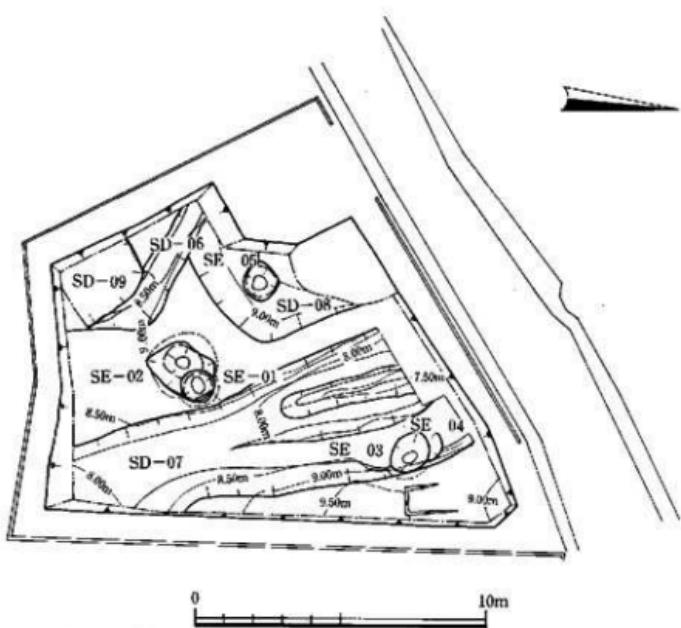


Fig. 5 調査地点遺構配置図

推定でき、尾敷地を固む濠が発達していたと考えられる。本調査地は、狭い範囲の調査であるが、古墳時代初頭の井戸の検出から、突帯文土器期からの弥生時代の集落の存続を考えるうえで参考となり、中・近世を含めた板付遺跡の様相把握の一助となり得よう。

検出遺構は、井戸をSE、溝をSD、柱穴をSPと遺構記号を使用し、検出順に遺構記号の後に2桁の通し番号を付した(例、SE-01…SD-06…)。なお、本書では、遺構名と遺構記号を併記する。

出土遺物は8901の遺構番号の後に、土器は00001から、石製品は01001から、土製品は02001からの5桁の通し番号を付し登録番号とした。本書では、実測図・図版については遺跡番号を省略し、5桁の登録番号をつつい、本文中の遺物説明では登録番号の2桁・4桁を使用した(01…10…0100…1001…2001)。

2. 遺構と出土遺物

1) 第1号井戸 (SE-01) (Fig. 5・6)

本井戸は、調査区のほぼ中央部の標高9m前後の鳥栖ローム平坦面で検出し、第2号井戸を切っている。検出面では長軸1.35m、短軸1.05mの梢円形を呈しているが、第2号井戸と切り合っているため西側が崩壊したと考えられ、本来的には径1m強の円形の平面形をもっていたと考えられる。鳥栖・八女ロームを掘り貫き、硬砂層まで掘り込み2.6m遺存している。本井戸は、含水層である硬砂層の水を利用したもので、鳥栖ロームと八女ロームの境にも少量の湧水があつたと考えられ、両ロームの境界部にくずれがみられる。覆土は上部が暗褐色から黒褐色の締まりのある土で、中部から下部にかけては、ロームの崩壊を含んだ黒褐色粘質土、最下部は黒灰色の砂質土となっている。

遺物は、上部で弥生時代中期から同時代終末期の土器の細片、黒曜石製の石核・剥片・削片、片刃石斧などが出土した。井戸祭祀と考えられる遺物は、標高7.9m前後の中央部で壺形土器1点が横になった状態で、標高7.4~7.8mの東北壁に沿った形で壺形土器1点、壺形土器3点まとまった状態で、標高7.3mで壺形土器が出土した。さらに中央部の標高6.8~7.2mで壺形土器4点が坐った状態で出土した。

出土遺物 (Fig. 7~9) 69~72は井戸上部出土のもので、他は祭祀遺物といえよう。15・66・68・69は壺形土器、70は鉢形土器、他は壺形土器である。以下、形土器を省略し、壺・鉢・壺とする。

壺は、逆字状口縁部をもつ16・68と、「く」の字状口縁部をもつ15・69に大別できる。本井戸は切り合っており、前者は第2号井戸の遺物の混入といえよう。15・69とも丸みをもった不安定な底部をもち、胴部はやや丸みをもっている。口縁部外面から口唇にかけて一部横ナデが施されている。ほかの器内外面はハケ目調整が施され、胴部内面上部は板状工具?による縱方向のナデが加えられている。15は口径13.6cm、器高15.8cm、底径3.6cm。69は口径14.6cm。70は鉢で、丸みをもった底部をもっていたと考えられ、底部から外湾気味に立ち上がり口縁となっている。器外面はハケ目調整が施され、下半はヘラケズリが加えられている。口縁部は横ナデ、内面はナデで仕上げられている。口径15.4cm。

壺は、袋状口縁壺(67)・瓢形土器(72)・広口壺(10・71)と直口壺(09・11~14・16~19)に大別できる。67・71・72は第2号井戸の遺物と考えられる。10は頸部に刻目をもつ貼付け突帯をもち屈曲して外反し口縁となる壺で、器内外面ともハケ目調整が施されている。口径18.6cm。直口壺は球状の胴部をもち屈曲して短く立ち上がる09と5cm前後立ち上がる11~14・17~19、丸みをもつ長胴をもち屈曲して短く立ち上がる16に大別できる。09は丸みをもつ底部?をもっている。胴部外面はハケ目調整を施し、下部はヘラケズリが加えられている。口縁部は

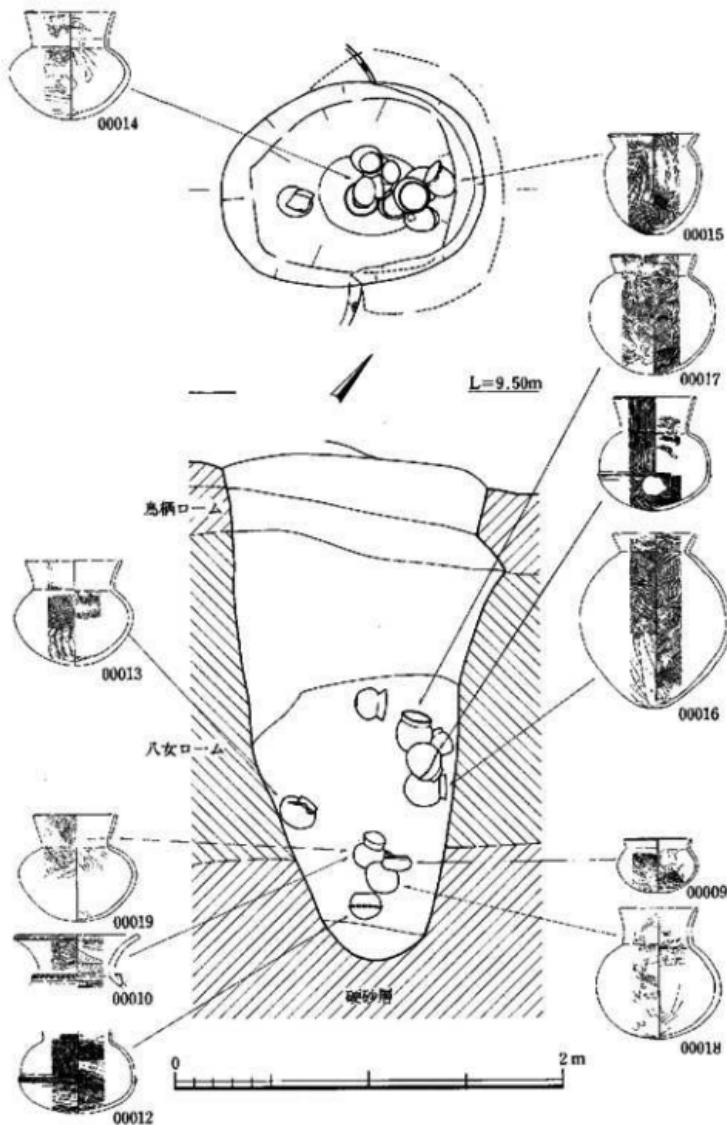
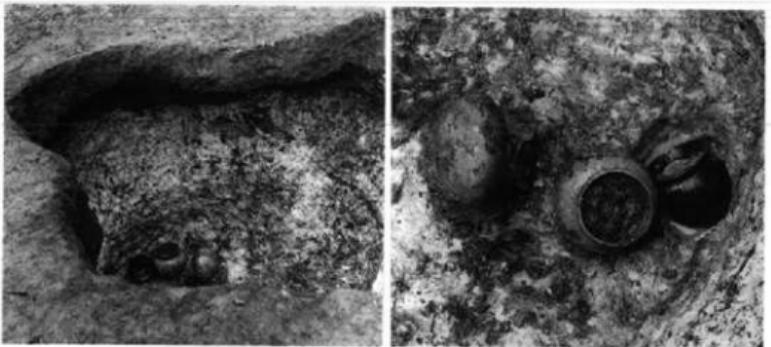
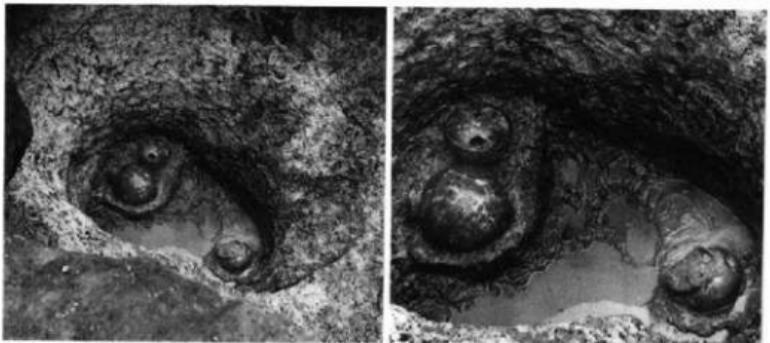


Fig. 6 第1号井戸 (SE-01) 断面図



1) 14·15·17出土状况



2) 11·13·16出土状况



3) 09·18·19出土状况

Fig. 7 第1号井戸遺物出土状況

横ナデ、内面下部はハケ目調整、上部は指ナデが施されている。口径10.2cm、器高8.4cm、底径3.4cm。17は09と11等の間にくる立ち上がりをもつもので、器内外面はハケ目調整が施され、外面部近くにヘラケズリが加えられている。口径12.6cm、器高18.85cm。11・12は胴部中央に貼付け突帯を巡らし、12は突帯に刻目を施している。器外面はミガキ、内面はハケ目調整後一部ナデを加えている。

11は焼成後の穿孔があり、12は口縁部が欠失している。11は口径12.4cm、器高17.8cm。13の器外面上部はハケ目調整後口縁部にかけて一部横ナデ、下部はナデ後ミガキ、内面の胴上半部

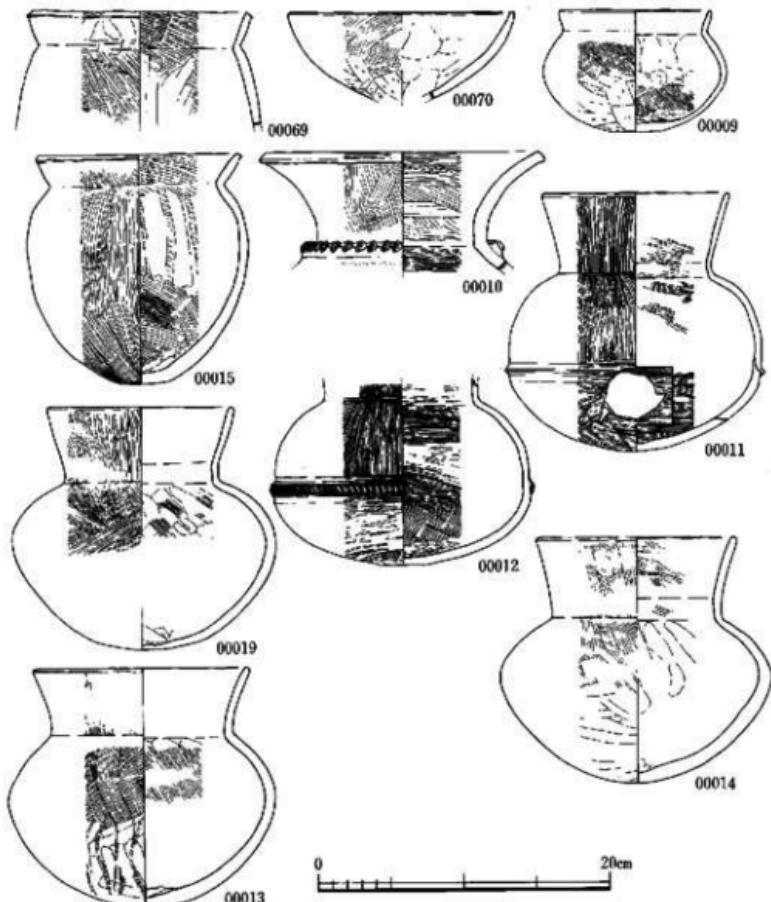


Fig. 8 第1号井戸出土土器実測図(1)



Fig. 9 第1号井戸出土土器

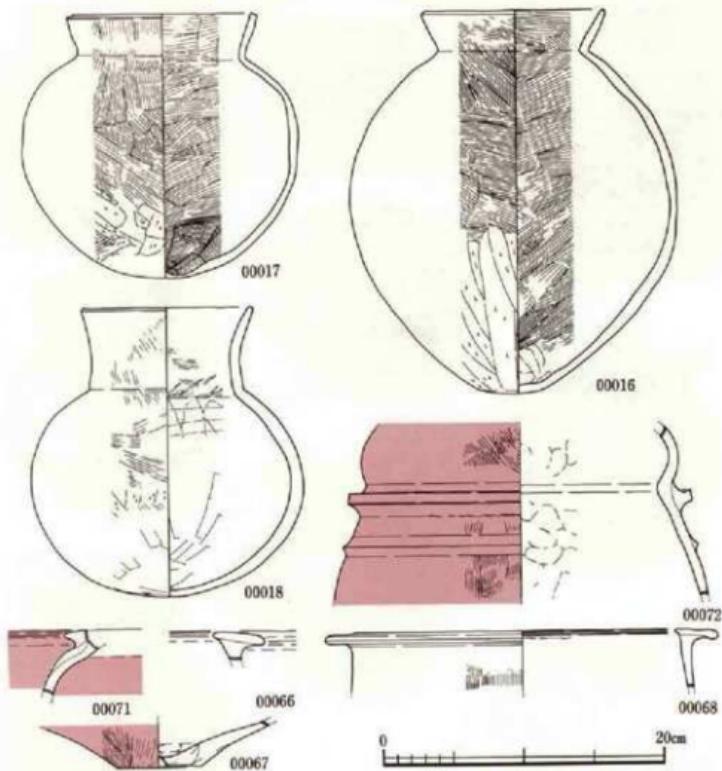


Fig.10 第1号井戸出土土器実測図(2)

にハケ目調整が残っている。口径14.2cm、器高16.5cm。14・18・19は屈曲部から短く直線的に立ち上がり、やや開きながら口縁となっている。器内外面ともナデが施され、胴外面上半部から口縁部4にかけハケ目調整痕が残っている。3点とも口縁の一部を打ち欠いている。14・18・19は口径13.2cm、11.9cm、12.4cm。器高16.95cm、20.7cm、16.7cm。16は丸みをもつ底部をもち、器内外面はハケ目調整が施され、胴外面上半部にヘラケズリ？が加えられている。口径12.6cm、器高27.4cm、底径4.25cm。

なお、第2号井戸上部出土の39は本井戸との境界で出土していることから、本井戸出土のものといえる。以上の出土遺物から、本井戸は弥生時代終末期のものといえよう。

2) 第2号井戸 (SE-02) (Fig.10~18)

本井戸は調査区のはば中央部に位置し、第1号井戸に切られている。検出面での平面形は隅丸方形を呈し、一辺約1.5mを測る。平面形が不整形であり、弥生時代終末期の長軸2.4m、短軸0.7m前後の土壙が切り合っている可能性があるが、検出面での覆土が第1号井戸より少し黒みが強い程度であるため確認が不可能であった。約2.9mの遺存で、鳥栖ローム・八女ロームを掘り貫き、硬砂層まで掘り込んでいる。本井戸は含水層の硬砂層の水を利用しているが、鳥栖ローム・八女ローム境界の湧水もあったと考えられ、両ローム境界部が30cm幅で崩落している。

遺物は、井戸上部で土器の細片と黒曜石製の剝片・削片等が出土した。祭祀と考えられる遺物は標高7.55mで壺1点が出土し、標高6.9~7.35mにかけて12点の袋状口縁壺がまとめて出土した。この12点の壺は下4点が完形の状態であり、その上に破碎されたものが數きつめられた状態で出土した。さらに、標高6.75m前後の中央部で袋状口縁壺1点が出土した。これらの祭祀土器は、北西方向から投入されたものか。

出土遺物 (Fig.12~18) 本井戸からは、祭祀土器が比較的まとまった形で出土した。出土遺物としては、壺(01~07・26~33・35~38・43・44・48)、甕(34・39~42・45)、高環(49)、鉢(46)、土製投彈(2001)などがある。

壺は、袋状口縁壺(01~07・26~30・32・33・43・44)と直口壺(31・35~38)、広口壺(48)に大別できる。袋状口縁壺は、26~29が完形の形で、30が口縁部を打ち欠き欠失した状態で出土したが、他はいずれも破碎された状態で出土した。29は胴部突帯下に穿孔がみられ、26~28は口縁部の一部を打ち欠いている。いずれも器外面と口唇部は丹塗りで、05のように頸部まで丹塗りのものもある。29は球状をなす胴部をもち、底部がやや上げ底で、頸部を意識した形で、口縁部下胴部との境に三角突帯を、胴中央部やや上に2条のM字貼付け突帯を巡らしている。外面は突帯部を除きミガキが施され、口縁部下の突帯直上とM字突帯間は文様状のミガキが加えられている。口径11.9cm、器高31.6cm、底径7.5cm。05は平底の底部をもち胴部・頸部・口縁部の境が不明瞭で、口縁部はやや内傾するのみで袋にはなっていない。外面はミガキが施され、胴下半部にナデが加えられている。口径9.1cm、器高18.6cm、底径7.05cm。他の袋状口縁壺は口縁部と頸部の境に三角貼付け突帯を巡らしている。30が胴部と頸部の境が明瞭であるほかは胴部から連続して頸部となっている。底部は01・02・04・07が平底で、ほかのものはやや上げ底となっている。02・04・28・30・32・33の外面はミガキが施され、01・27・43はハケ目調整痕がみられる。なお、06・07はナデが施されている。なお、袋状口縁壺の内面は指揮痕が残りナデが加えられているが、01・03・32などハケ目調整痕が残っているものもある。いずれも頸部内面には絞り痕がみられる。01~04の口径は9.7cm、9.75cm、11.45cm、10.25cm。器高は26.6cm、25.2cm、31.65cm、30.08cm。底径は8.5cm、6.6cm、7.7cm、8.25cm。07・26~28・33の口径は9.55cm、10.05cm、10.7cm、10.2cm、9.3cm。器高は30cm、28cm、29.7cm、29.45cm(27.5

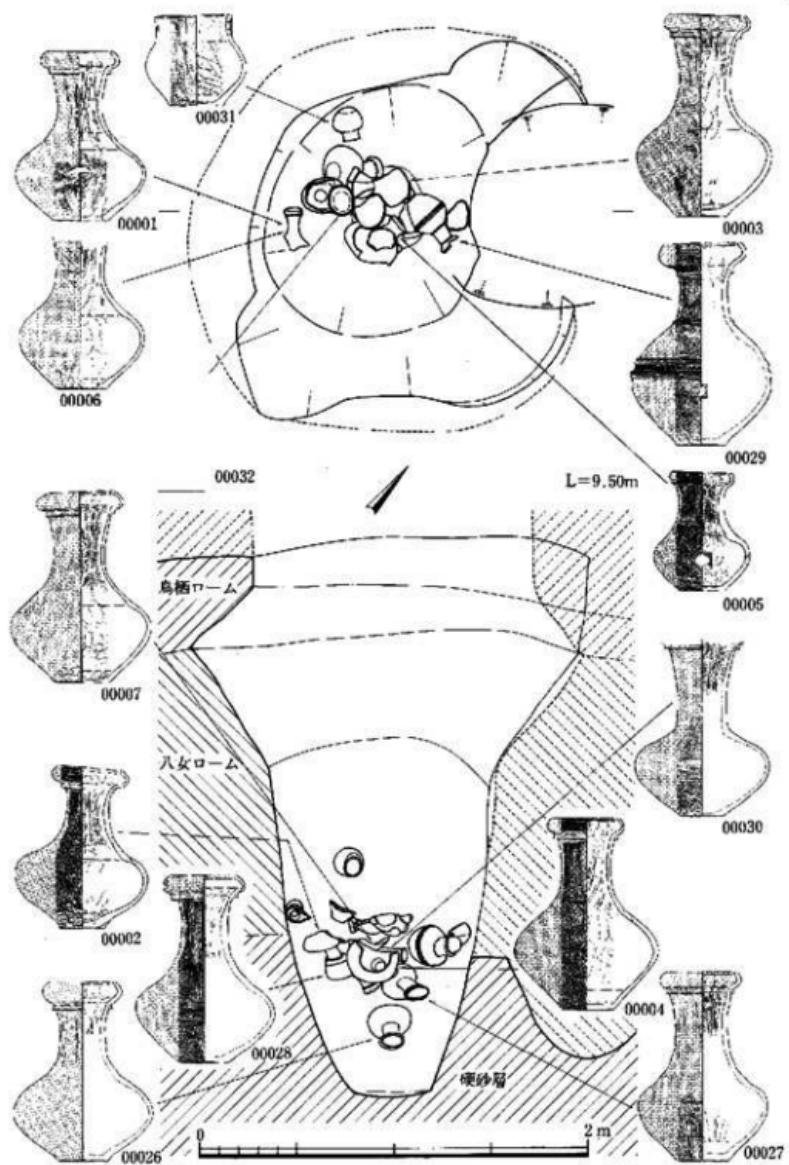
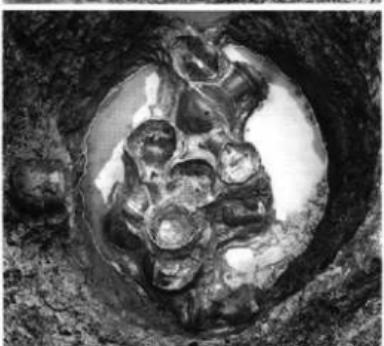
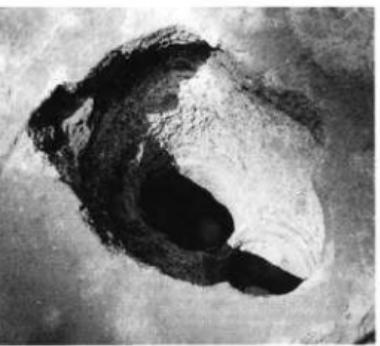
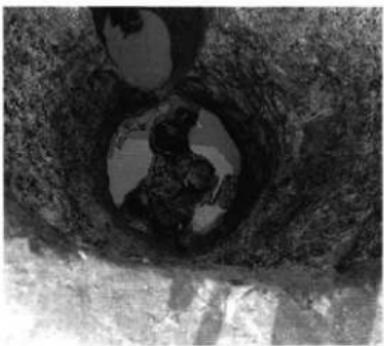


Fig.11 第2号井戸(SE-02)実測図



1) 遺物検出状況

3) 26~28出土状況



2) 04・28・29等出土状況

Fig.12 第2号井戸

4) 第1・2号井戸完掘状態

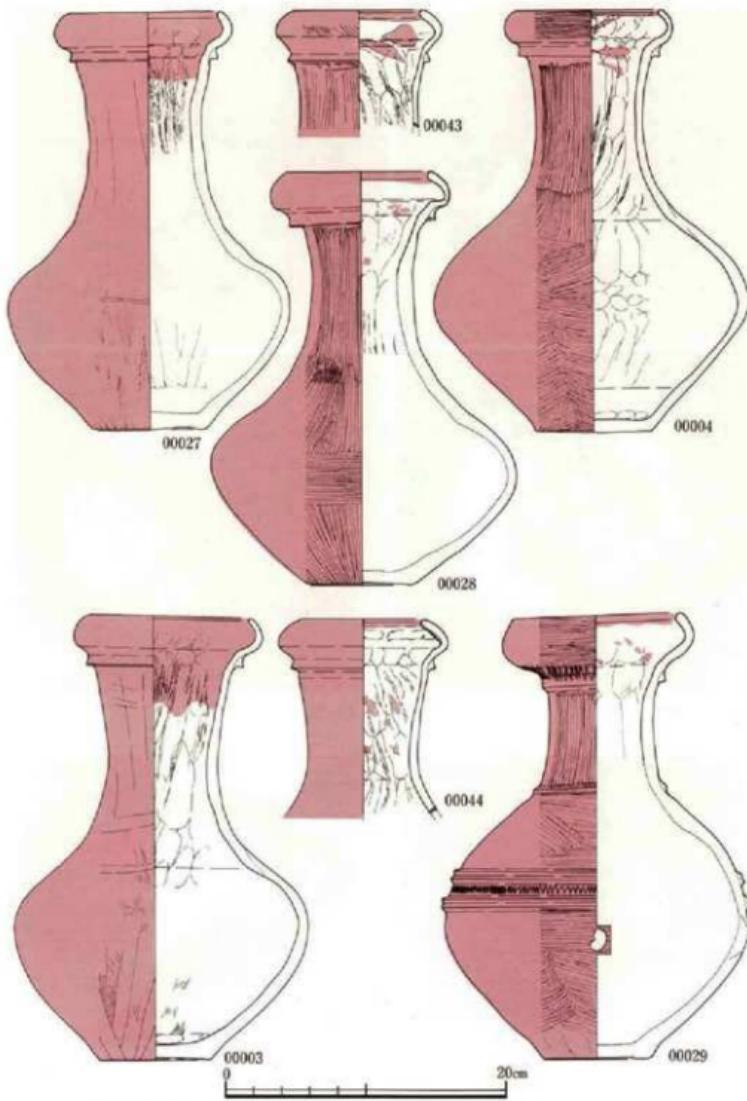


Fig.13 第2号井戸出土土器実測図(1)



Fig.14 第2号井戸出土土器(1)

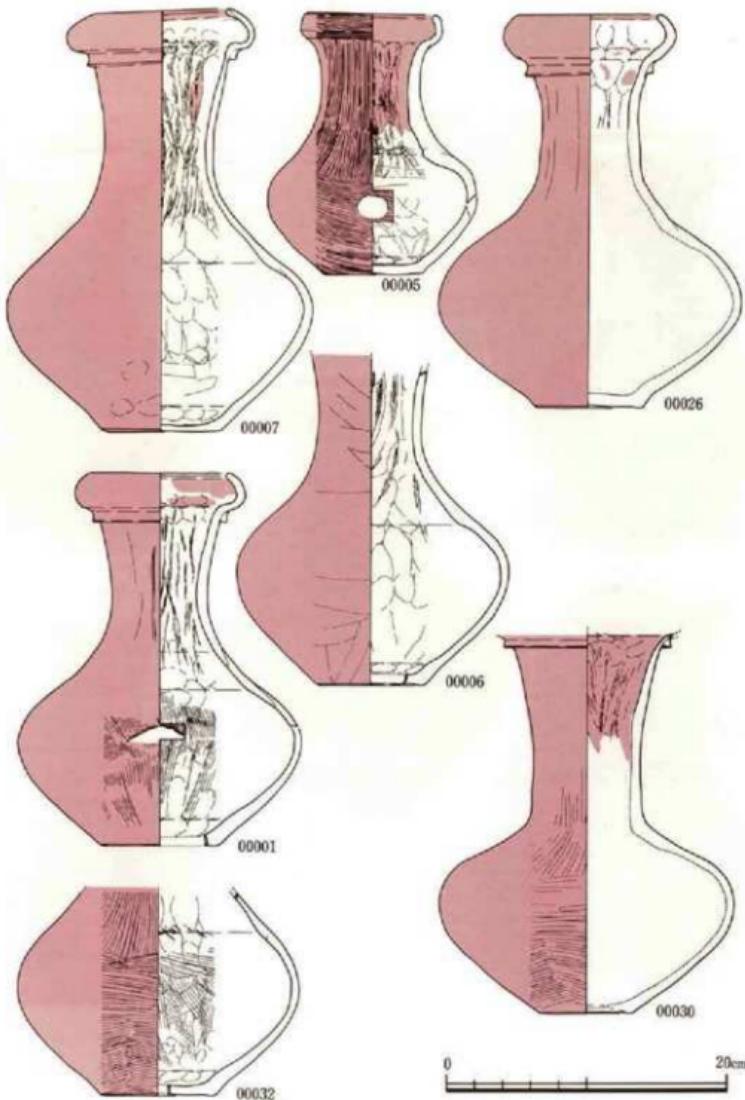


Fig.15 第2号井戸出土土器実測図(2)

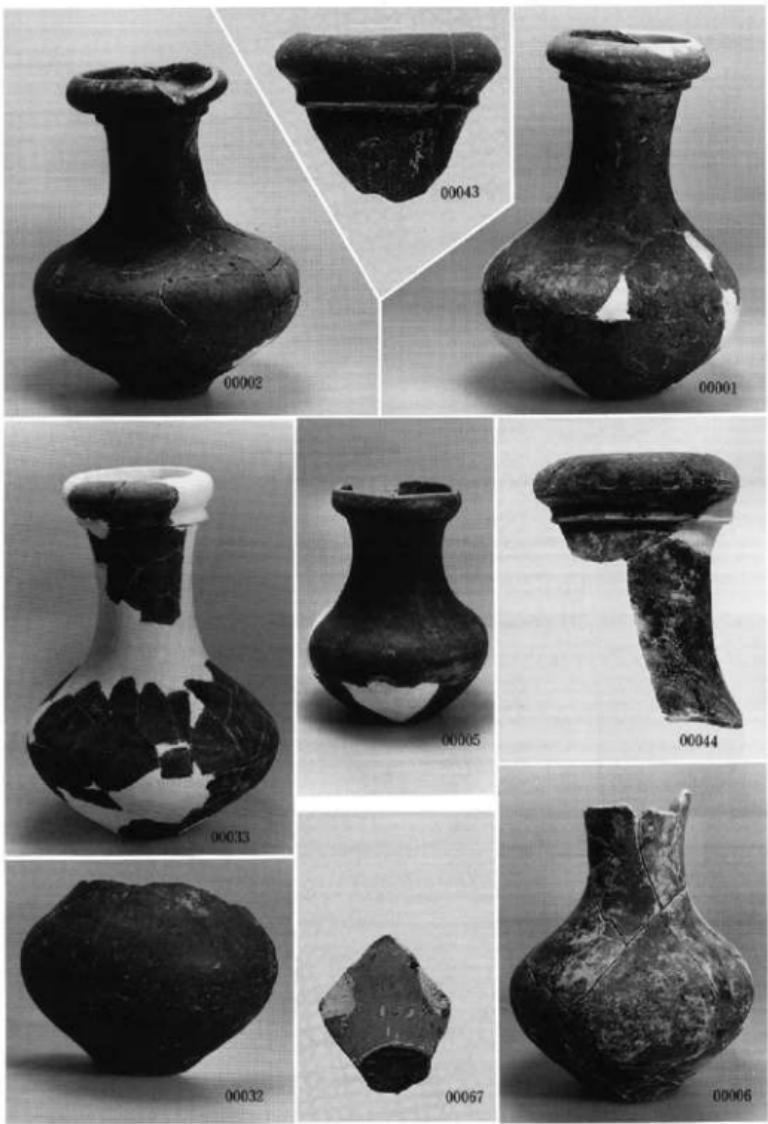


Fig.16 第2号井戸出土土器(2)

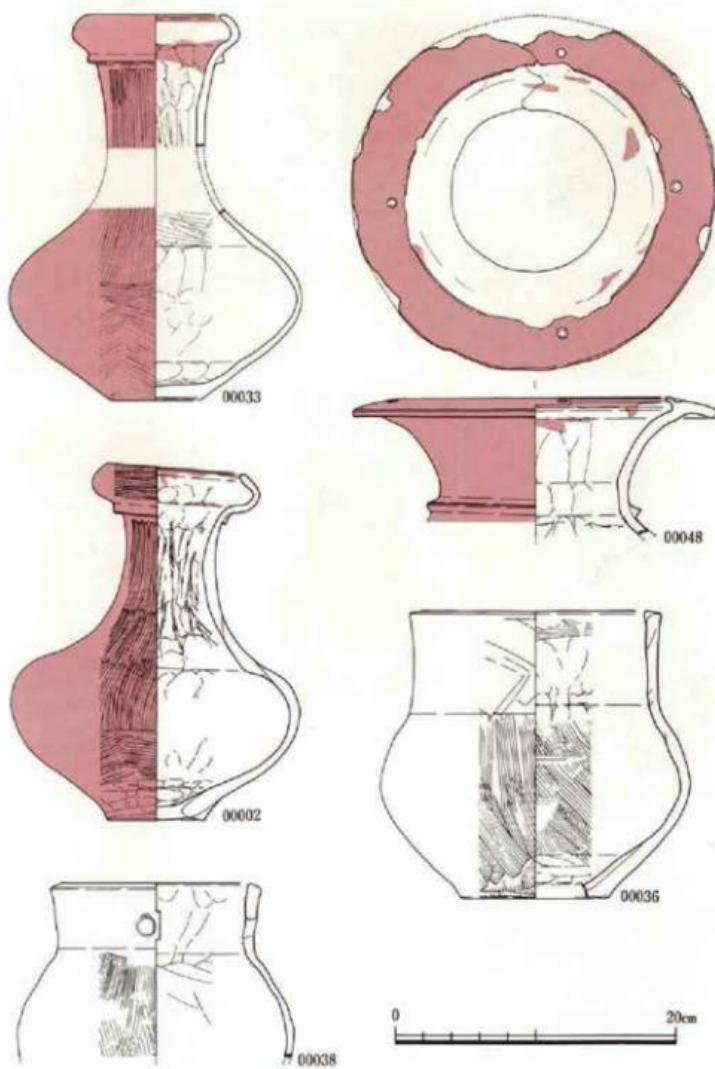


Fig.17 第2号井戸出土土器実測図(3)

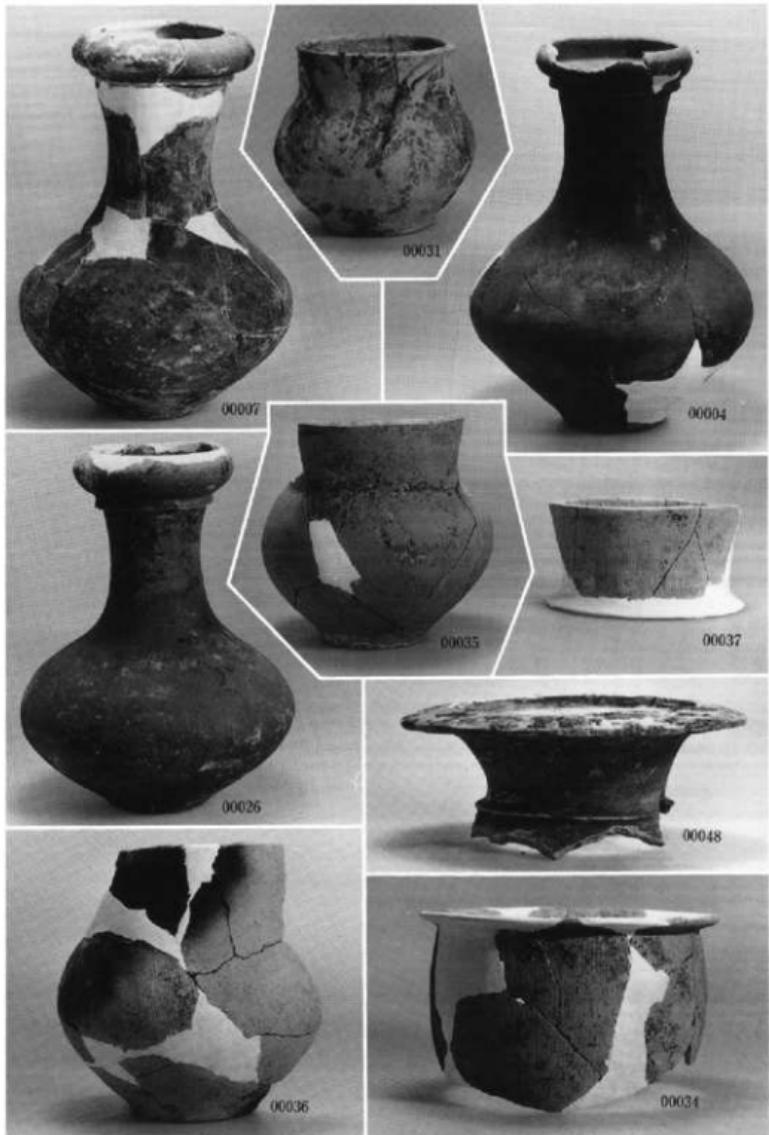


Fig.18 第2号井戸出土土器(3)

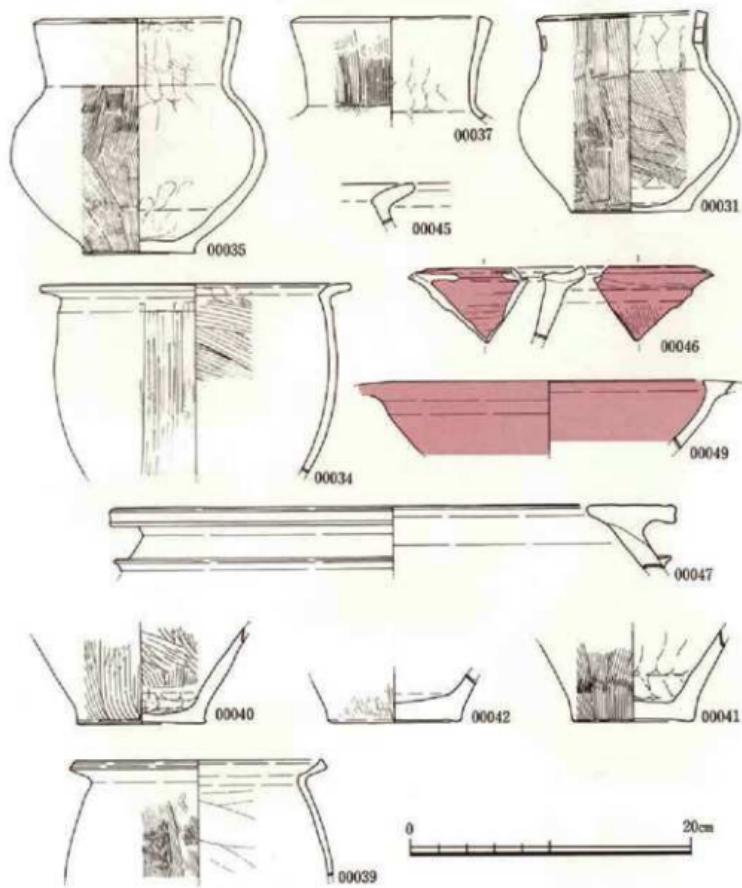


Fig.19 第2号井戸出土土器実測図(4)

cm)。底径は8.6cm、7.4cm、8.05cm、7.6cm、6.3cm。48は錐状口縁をもち、胴部と頭部の境に三角突帯を巡らし、口縁平坦面に相対する4ヶ所に竹管文があり、口縁部から頭部外面は丹塗りとなっている。口径26cm。直口壺は、31・36・38は胴部からほぼ垂直に立ち上がり口縁となるものと、35・37のように屈曲しやや開きながら口縁となるものがある。31・38の口縁部には1ヶ所の焼成前の穿孔がある。胴部外面はいずれもハケ目調整が施され、口縁部外面は31・37が

ハケ目調整、35・36・38はナデが施されている。胴部内面は31・36はハケ目調整が施され、35・38はナデが施されている。口縁部内面はナデで仕上げられている。31・35・36の口径は12cm、14.8cm、18cm。器高は14.2cm、16.8cm、20.5cm。底径は8.6cm、7.8cm、10.2cm。

46は鉢または高壺と考えられ、内外面とも丹塗りである。49は鉢状口縁をなす高壺で、口径(29cm)。34・45・47は逆L字状口縁をなし、47は口縁平坦面をもち、口縁部下に一条の三角突帯を巡らしている。34の胴部外面、胴内面上部はハケ目調整が、口縁部は横ナデが施されている。34・47の口径は22cm、40.4cm。40～42は上げ底気味の甕の底部で、底径は9cm、8.3cm、8.9cm。

2001は手捏ねで整形した土製投弾で、長さ4.1cm、最大厚2cm。

以上の出土遺物から、本井戸は硬砂層の湧水を利用した弥生時代中期末頃のものといえよう。

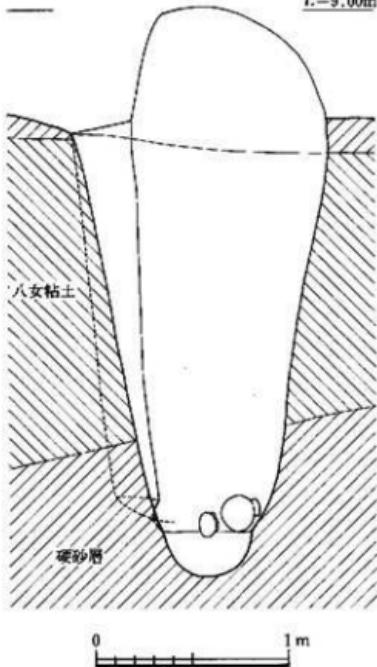
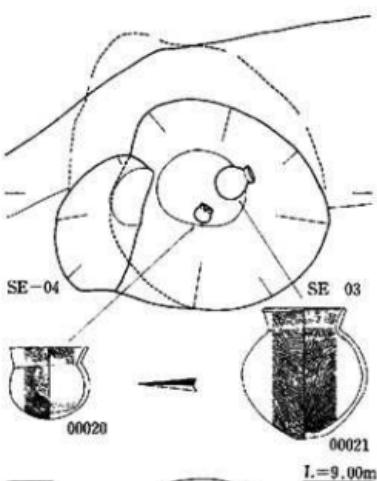


Fig.20 第3・4号井戸(SE-03・04)実測図

3) 第3・4号井戸 (SE-03・04) (Fig.19~23)

第3・4号井戸は調査区の北東部に位置し、第7号溝に切られている。第3号井戸は第4号井戸を切っている。第3号井戸は検出面で径1.1m前後の円形を呈し、鳥栖ローム・八女ロームを掘り貫き硬砂層を掘り込んでいる。3m弱の遺存で、鳥栖ローム・八女ロームの境界の湧水の

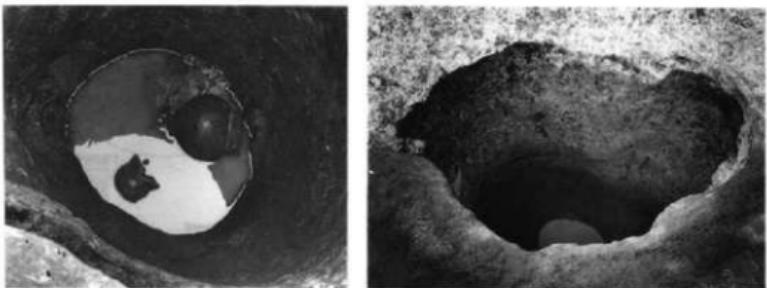


Fig.21 第3・4号井戸遺物出土状況および完掘状態

ため、両ローム境界部が崩壊している。遺物は上部から底まではまんべんなく出土したが、比較的少なく、最下部の標高6.4m前後で2個の祭祀と考えられる壺が出土した。

第4号井戸は、第3号井戸と第7号溝に切られているため鳥栖ロームと八女ロームの境で検

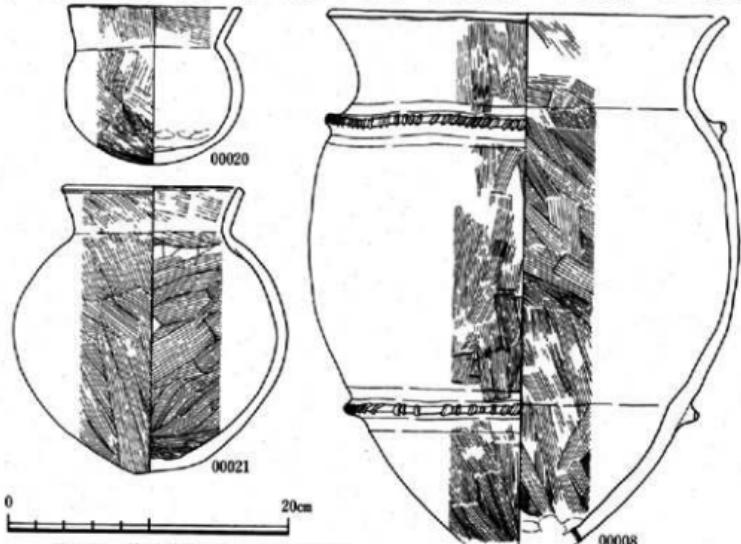


Fig.22 第3号井戸出土土器実測図

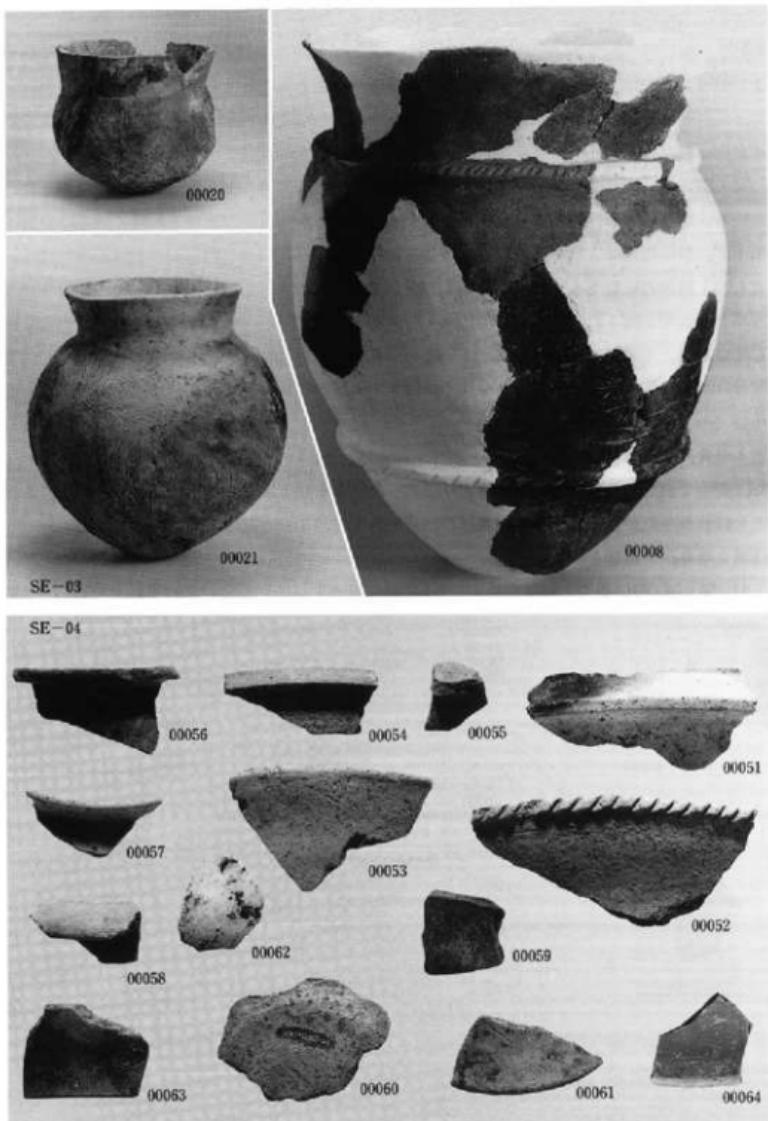


Fig.23 第3・4号井戸出土土器

出し、北側の約2.1mが遺存しているのみである。第3号井戸と同様、含水層である硬砂層まで掘り込んでいる。遺物としては少量の土器の破片があるのみである。

第3号井戸出土遺物 (Fig.21・22) 本井戸からは、2点の祭祀遺物と考えられる壺と少量の破片が出土した。そのうち、下部から出土したまとまった破片が號1個体となつた。

20・21は直口縁の壺で、20は球状をなす胴部から屈曲して開きながら立ち上がり口縁となっている。器外面と口縁部内面はハケ目調整が施され、部分的にナデが加えられている。口唇は横ナデ、胴部内面はナデで仕上げられ底には指押え痕がみられる。口径12.3cm、器高11.3cm。21も20と同様の器形をもつているが、不安定な丸底気味の底部をもつている。器面は外外面ともハケ目調整が施されている。口径13cm、器高20.45cm、底径4.9cm。08は長めの胴部から外反して口縁部となる甕で、口縁部下と下半部に一条の三角刻目貼付け突帯を巡らしている。突帯貼付け部・口唇から口縁部内面にかけては横ナデ、他の器面はハケ目調整が施されている。口径28.6cm、遺存高35.7cm。

第4号井戸出土遺物 (Fig.22・23) 本井戸からは、甕・壺・高環・器台等の細片が少量出土した。調査で出土した土器は可能なかぎり図化した。検出時に第3号井戸と切り合い関係にあることはわかったが、上部は第3号井戸の崩落があるため遺物が混入した。51～53・55・59・61は第3号井戸の遺物といえよう。

54・56・58・63は甕で、56は内傾する逆L字状口縁部をもち、58は口唇が垂れている。51・52

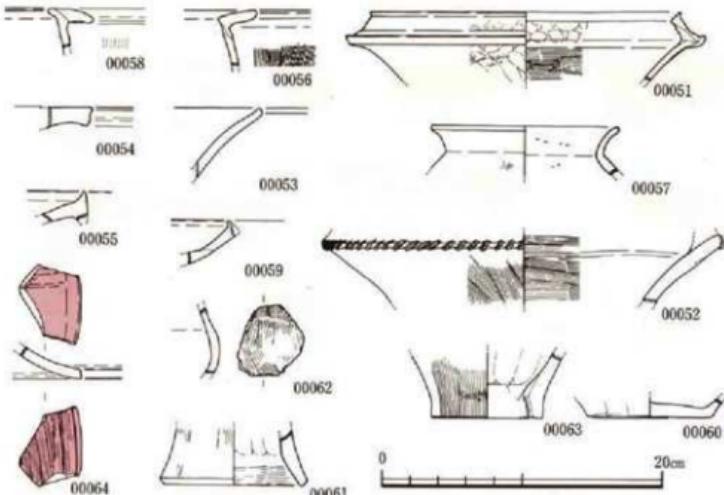


Fig.24 第4号井戸出土土器実測図

は複合口縁壺、53・55・57は壺の口縁部、62は壺の胴部か。60は壺の底部か。59は高壺の口縁部、64は高壺の脚部として図化したが、壺の口縁部か。内外とも丹塗りで、器面はミガキが施されている。61は器台。

以上の出土遺物から、第3号井戸は弥生時代終末期、第4号井戸は弥生時代中期末から後期初頭のもので、両方井戸とも硬砂層の水を利用している。

4) 第5号井戸 (Fig.24~27)

本井戸は調査区北西部の排土窪き場近くに位置し、第8号溝に切られていた。鳥栖ローム・八女ローム境界で検出したため、長軸1.55m、短軸1.2mの不整形を呈していた。鳥栖ローム・八女ロームを掘り貫き、硬砂層に掘り込んでいた。

遺物は上部から下部までむらなく細片が出土したほか、祭祀と考えられる甕・鉢・高壺各1個が底近くの標高6.5m前後で出土した。

出土遺物 (Fig.26・27) 本井戸から出土した遺物は細片が多く、図化できたのは底近くで出土した祭祀と考えられる遺物のみである。出土遺物は、甕(22)・壺(23)・鉢(25)・高壺(24)などがある。

22は尖底に近い底部をもち、胴部がやすぼまり、やや開いて口縁となり、口縁部と胴部の境は不明瞭である。器外面はハケ目調整が施され、口唇は横ナデで仕上げられている。口径16.6cm、器高16.65cm。23は球状をなす胴部をもち、屈曲して開きながら立ち上がり口縁となっている。器外面・口縁部内面・胴部内面下半部はハケ目調整が施され、口縁部・胴部内面下半部は横ナデ・ナデを加えている。なお、胴部内面上半はナデが施されている。口径11.8cm、器

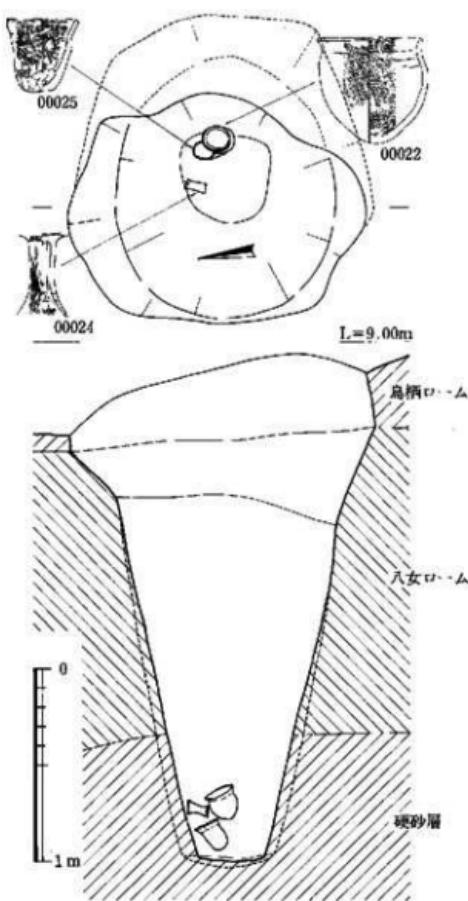


Fig.25 第5号井戸 (SE-05) 実測図

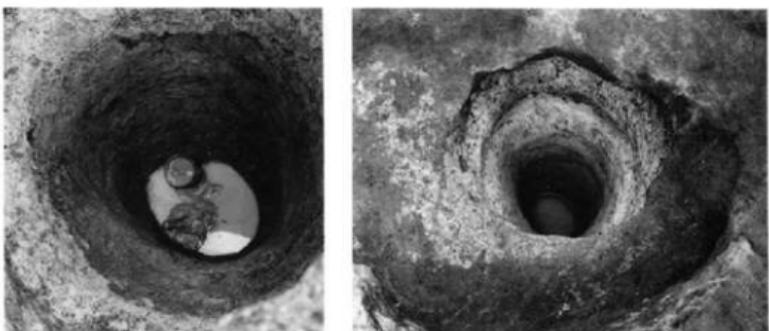


Fig.26 第5号井戸遺物出土状況および完掘状態

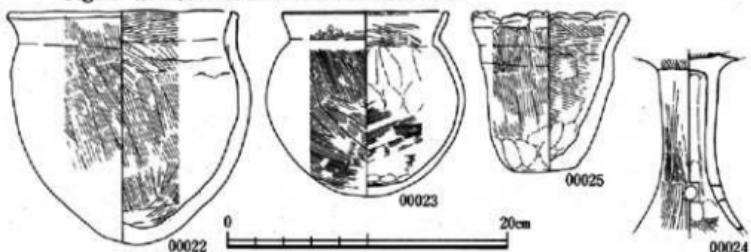


Fig.27 第5号井戸出土土器実測図

高13.15cm。25は手捏ねで整形し、口唇に切り込みを入れ波状口縁となっている。胴内外面にはハケ目調整が施され、手捏ね痕が残っている。鉢としたが、支脚とも考えられる。口径11.2cm、器高11.4cm、底径4.6cm。24は脚部で、裾近くに焼成前の穿孔がある。以上のはか、土師器破片が出土している。

以上から、本井戸は弥生時代終末期から古墳時代初頭の硬砂層の湧水を使用した井戸といえよう。



Fig.28 第5号井戸出土土器

5) その他の遺構と出土遺物 (Fig. 4・28・29)

本調査区では4条の溝状遺構 (SD-06~09) を検出した。いずれも逆台形を呈する溝で、第6号溝が古く、第7~9号溝は同時期のものか。第7号溝はN-25°-Wの方位をとり、第8号溝はF-5C調査地点検出の溝とつながり、N-61°-Eの方位をとり、本調査区がコーナー部となっている。いずれも出土遺物から、近世後半の屋敷を囲む濠と考えられる。

本調査区では、5基の井戸や溝の覆土・埋土から弥生時代中期前半以上のものと考えられる石製品が出土した。1002は今山産出玄武岩製の太形蛤刃石斧で、1004は頁岩製の方柱状片刃石斧で器長9cm、最大幅3.1cm、最大厚2.3cmを測る。1003は良質の黒曜石角礫を素材とした石核である。いずれも弥生時代前期後半前後のものといえよう。

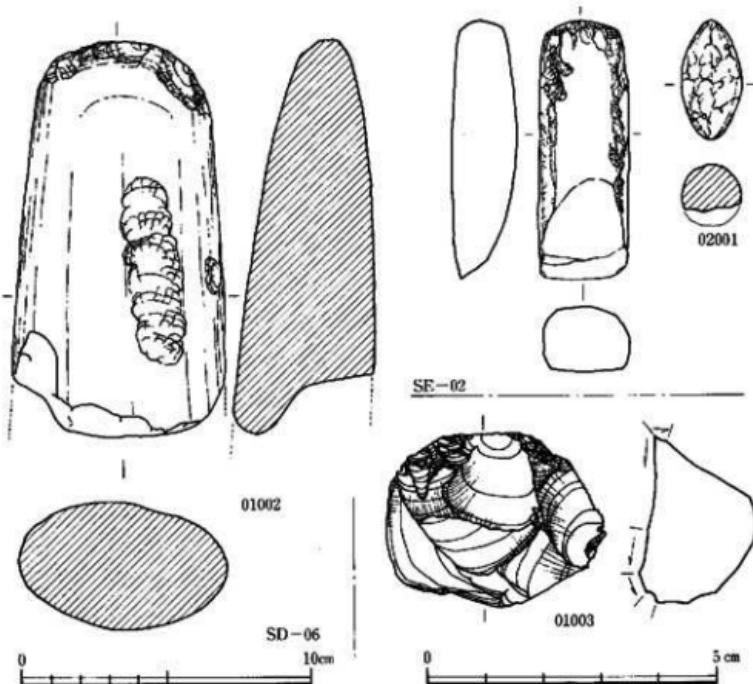


Fig.29 出土石製品・土製品実測図

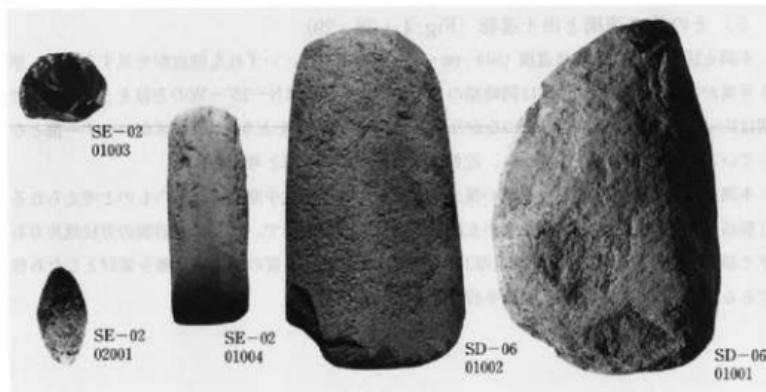


Fig.30 出土石製品・土製品

III おわりに

本調査地は板付中央台地の北部にあたり、国指定板付史跡の北側に接近して位置している。163m²という狭い範囲の調査であったが、以下のような成果をあげることができた。

検出遺構としては、弥生時代中期末から同時代後期初頭の井戸2基、弥生時代終末期から古墳時代初頭の井戸3基、弥生時代の柱穴3個と近世後半期の溝4条がある。

井戸5基(SD-01~05)は、いずれも鳥栖ローム・八女ロームを掘り貫き硬砂層の湧水を利用し、4基(SD-01~03・05)で井戸祭祀の土器が出土した。

F-5c調査地点の成果と合わせてみていくと、板付中央台地の北側中央から北側東縁辺は弥生時代前期から中期前半の遺構がなく、弥生時代中期後半から古墳時代初頭の井戸が分布しており、同時代の集落が広がっていたことが確認できた。

板付周辺遺跡調査報告書(16)

— F-5 i 調査地点 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第362集

1994年(平成6年)3月31日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神一丁目8番1号

印刷 アド印刷株式会社